き継がれていて、私自身もごく普通の生活をすることを心がけています。

大正6年、よねの援助により日本初の公立女子商業校である神戸市立女子商業学校が創立しました。「これからは女も経理ができなくては」というよねの思いからです。この神戸市立女子商業学校の後継校・神港高校は、今年4月に統合され、新しく神戸市立神港橘高校が開校します。そこで当社は、新設される茶室の床材を寄付することにしました。こういう形でよねの意志を継ぐことができて、嬉しく思います。

来年は、神戸開港150周年。これに合わせて、鈴木商店跡地に記念碑を建てる計画があります。鈴木商店という一時代を築いた企業の末裔だという誇りを、改めて従業員たちに伝えていきたいですね。

「おしん」のモデルと言われたヤオハン創業者

和田カツ

明治39（1906）年、小田原の青果店「八百半」の長女として生まれる。結婚を機に大と創業した食品卸売店を発展させ、巨大スーパーチェーン「ヤオハン」の礎を築く。

長男 和田一夫さん

昭和47年、カツの父・半次郎の卒寿を祝う会で、夫・良平とともに

「ヤオハン」という社名は、祖父「半次郎」が始めた八百屋だったから。祖父の店「八百半」の従業員だった和田良平を、半次郎は気に入って、娘カツの結婚相手としました。カツはこの結婚が嫌で嫌で、家出してまで抵抗したのですが、結局、泣く泣く嫁に行ったと聞いています。長男の私が生まれると、「この子のために頑張ろう」と気持ちを切り替え、経理を勉強するなど、率先して仕事を見つけるような態度に変わったそうです。やがて両親は熱海に青果店を構え、朝から晩まで必死に働いて、八百半熱海店を地域一番の繁盛店に成長させます。

私には4人、弟がいます。弟が生まれるたびに、母は竹筒を用意して小銭を入れていました。5人全員を大学に行かせるという悲願のために、つましい生活の中から、5本の竹筒にそれぞれ教育資金をためていたんです。子供を立派に育てたい一心だったんですね。ただ、子どもたちが大学に入る頃には、八百半は10人以上従業員を抱える大店になっていましたから、「竹筒貯金」に頼る必要はなかったんですけどね。

母は「生長の家」の哲学の素晴らしさに心服し、信仰していました。その哲学と、商業界で学んだ真の商人道を融合させ、掛け売り中心の商いを「現金正札販売」に切り替えたことで、ヤオハンの躍進は始まります。昭和30年ごろまで、八百半の売り上げの9割以上は旅館への掛け売りでしたから、これは非常に大きな賭けでしたが、万難を排して、お客様のためにリベートのない正規価格の商売に変えたわけです。こうして総合小売店として再スタートした「八百半食品デパート」は、その安さから大評判となり、新聞にも載りました。

37年に私が経営を継いでから、生長の家の哲学を社是の中に取り入れた「ヤオハングループ宣言」を作りました。そして社員一丸となって、ヤオハンを世界16カ国と地域で450店舗を展開する大企業へと成長させました。この成功の背景には、母の徹底した従業員教育があります。どの国であろうと、母は真の商人道と、従業員を幸せに導く正しい人生観を、「ヤオハン精神」として現地で直接従業員にたたき込みました。最初は反発していた従業員たちも、やがて母の教えに共感し、誰もがヤオハン精神に心酔するようになり、みんなの心が一つになった。母にしかできない、すごい仕事だったと思います。

しかしご存じのとおり、ヤオハンジャパンは平成9年に倒産してしまいます。母が長年の闘病生活の末、他界したのは倒産の4年前。母はヤオハンという企業の大きな心棒の役割を担ってくれていたのでしょう。

わだ・かずお　昭和4年生まれ。ヤオハンを世界規模のグループ企業に発展させた

構成　ライター・伊藤あゆみ

母の晩年、私は海外出張から帰ると病床の枕もとで、必ず仕事の報告をしていました。それが私の楽しみであり、母もまた、とても喜んでくれました。そのことを思い出すと、今も涙が止まりません。

ちなみに「おしん」のモデルと言われたのは、橋田壽賀子先生がご近所にお住まいで、交流があったから。母の昔話を多少参考にされたのかもしれません。

大資本で新宿・歌舞伎町をつくった女性実業家

峯島喜代

実家「尾張屋」質店の5代目当主。明治9年に夫である4代目茂兵衛が他界し、5代目を継ぐ。東京の土地を大量購入し、不動産業の礎を築く。明治33年に尾張屋銀行、明治44年に尾張屋土地株式会社を創設。

尾張屋土地株式会社提供

尾張屋8代目 峯島茂兵衛さん

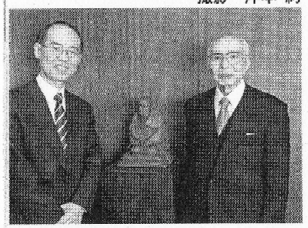
同9代目 峯島茂之さん

茂兵衛（以下M）「当社の母体である尾張屋は、約250年前に江戸で創業した質屋です。喜代は5代目ですが、4代目が71歳で他界したとき、まだ43歳でした。人一倍勝ち気な性格だったので、自分が継がなければ、と奮起したのでしょう」

茂之（以下S）「うちの実家には喜代の銅像があり、子どもの頃は『銅像のおばあちゃん』と呼んでいました。この銅像の銘は、渋沢栄一氏が書いたんですよ。喜代が渋沢氏とどんな交流をしていたのかはわかりませんが、渋沢氏を『お前さん』と呼ぶ唯一の人間が喜代だったという話もあります」

M「明治10年、西南戦争で暴落した公債を、喜代は大量購入します。これが大当たりで、急騰した公債を全部売り払い、東京の土地を買い集め始めました。まず神田小川町を6千坪。続いて鳥越町、浜町、蛎殻町、淀橋町……郡部も合わせると、最終的に20万坪以上も所有していました」

S「淀橋町は今の新宿歌舞伎町です。当時の歌舞伎町は大村藩の屋敷跡で、荒れた土地でした。そこを造成し、宅地開発を始めたのが、喜代の大きな仕事の一つでした」



撮影　岸本 絢

喜代の銅像（複製）の前で、8代目茂兵衛氏（右・昭和2年生まれ。尾張屋土地株式会社会長）と茂兵衛氏の長男・茂之氏（昭和38年生まれ。同社長）

M「歌舞伎町には、喜代の寄付金で東京府立第5高等女学校（現・都立富士高）が建てられたんですよ。喜代は最晩年に私の父を病床に呼び、『今の女子教育はあまりに理屈詰め。東京府に50万円寄付するから、もっと家政に役立つ学校を作ってほしい』と訴えたそうです」

S「空理空論を嫌う人だったので、より実践的な教育の場を求めていたのでしょう。職場でも、『事務所でつべこべ言ってないで、現場に行け！』とゲキを飛ばしていたそうです」

M「喜代は社会貢献への意識が高く、たとえば明治43年の東京市大水害の際は1千円の救援費を寄付しています。今の価値に換算すると、数百倍どころでは済まないでしょうね。大正7年に86歳で亡くなったときは、長年の国家への尽力が評価され、勲6等を授与されました。一方で、仕事には厳しかった。よく質屋の支店を朝6時くらいに突然訪問し、住み込みの小僧さんを慌てさせたそうです」

喜代の銅像に渋沢栄一（円内）が寄せた銘

S「朝寝坊が嫌いだったので、抜き打ち検査をしてカツを入れてやろうと思ったのでしょう。ただ、従業員思いでもあった」

M「そう、従業員に困ったことがあれば、物心ともに面倒を見たそうです。そして年頃の子女がいれば、『あの娘にはあの男だ』と媒酌をするのが趣味だった。これが全部円満にいったというのですから、たいした眼力です（笑）」

S「喜代の従業員を大切にする心は、弊社が引き継いでいきたい大切な教えの一つです。喜代が購入した土地の一部は、今でも当社の重要な収益源。喜代の精神と土地を大切に、これからも尾張屋を実直に続けていきたいと思います」